

『今日は早く帰れそうだから、待っていてもいい?』

携帯に表示される文字は、どう考えてもおかしかった。

彼の帰宅時刻は、ここ最近、11時過ぎである。

それなのに、早く帰れそう “だから” 待っているという。

意味がわからない。

彼女の思考は、彼には理解できないが多かった。

考えるだけ無駄だと思い、彼は返信した。

『駄目だ』

その返信は、すぐに来た。

『わかった』

やるべきことは山ほどある。

学会論文の作成に加え、手術が3件控えていた。

すべて脳外科系である。良い研究材料になるものばかりだった。

難易度は非常に高く、いくら彼だとして、準備無しでは臨めない。

周囲は彼を天才だといい、まるで神様のようになんでもできている者も多いが、それは大きな誤解である。

もちろん誰でもできるわけではないが、彼の能力は、決して魔法ではないのだ。

冷静な分析と入念な準備があつてこそ、彼の手術は成功率100%なのであった。

いつものことだが、集中すると、時間は瞬く間に過ぎていった。  
我に返ったとき、時計の針はまもなく重なろうとしていた。  
作業的にもひと段落したので、帰り支度をはじめめる。  
ふたたび、メールの着信音が響いた。

『まだ、いる？』

表示された文面に、目を眇める。

『何の用だ』

今度も、返信は早かった。

『なんでもない。おやすみなさい』

彼はしばらくその文字を見つめていたが、やがてほっと息をつき、携帯を胸ポケットに入れた。  
めずらしいことではなかった。

彼女は用事がなくとも、時折連絡してくることがある。いちいち気にしていたら、キリがない。  
部屋を出て、ドアを閉めると、電子音が響き、オートロックが正常に作動したことを告げた。

彼が利用するいくつかの研究室のうち、最もセキュリティの厳しいのが、このオートウエコー  
ルの最奥にある部屋である。鍵を持っているか、誰かが中からあけてくれない限り、入ることが  
できない。

現状で、鍵を持っているのは彼だけであり、結局のところ、彼が認めた人間しか入れないこと  
を意味していた。

彼は、この邪魔されない空間を、こよなく愛していた。

孤独は肌になじむ。あまりに馴染みすぎて、やがて溶け合い、そのふたつは、ほとんど分かつ  
ことのできないものになろうとしていた。